

<1年生>

1. 3年間の目標



安居プライド

2. 活動内容

①学習の目標

- (1) 地域に根ざした活動にする。
- (2) 1年間の目標で掲げた力を付ける。
- (3) 全員が楽しめる活動にする。

②学習の流れ

(1) 全体での目標の共有 6月上旬

このプロジェクトは、生徒が進めること、このプロジェクトの目標を全体で共有した。活動に迷ったときはこの目標に戻れるように全体でしっかり共有するとともに、「活動の方向性と内容は、生徒が決める」→「責任をもってやる」ということを強く伝えた。

このとき実行委員も募集して決定した。

(2) 方向性の決定 6月上旬

マインドマップで安居地区のイメージをマップ化した。この地区にはどんなものがあるのか、グループごとに分かれてマインドマップを広げていく形で行った。そうするとどの班も「文化」「歴史」「食」「水」「ホテル」などのキーワードと伴に多くのポイントが出てきた。今回チームは4つにしたいという教員からの要望を伝えると、キーワードを4つに絞ろうという話になった。「文化」「歴史」「食」は、決まりで良いという意見の中、勇一が「水」と「ホテル」は関係があると公民館のイベントで言っていた。この2つは一緒にしても良いのではないかと公民館の主催事業での学びを元に提案をしてきた。この発言で4つのチームが決まると伴に、地域の中核である公民館と自分達のプロジェクトがつながる形となった。そしてチームの種類が決定した。「文化」「自然」「歴史」「水・ホテル」となった。

その後、4つのチームメンバー決定を行った。このメンバー決定は人数制限等は特に設けなかったが、自分達で自然と良い人数で決まっていた。リーダーも決めた。これも人

1年間の目標

協力
発言力
積極性



図1 マインドマップ

数制限をするわけではなく、やりたい人全員リーダー制をとった。

同時進行で実行委員が、この4つのテーマに会う3年間の目標を決めた。教員の方からは、「活動の後に、参加した人、企画した人が安居を好きになるようにしよう」という事だけ伝えた。

(3) ビジョンの構築と活動内容の相談 6月下旬

やろうにもいままで今回のようなクリエイティブな活動をしたことがないから分からないという意見が多数聞かれたので、公民館の方に活動の方法などを聞こうという流れに自然になった。これは、前回の勇一の発言が大きく意味をなしていると感じた。公民館の方と実行委員が交渉し、学校に来ていただけることとなった。

実行委員の進行で公民館の方の活動内容を紹介してもらった。自分達の身近にある公民館がたくさん活動をしていることを知っている生徒もいたが、知らない子も多くいることが分かった。安居地区の公民館はとても多くの主催事業を行っており、安居地区を良くしたい。安居地区のために活動したいという気持ちを感じる事が出来た。これこそが、「地域の思いの伝承」であり、この地区を好きになる第一歩なのではないかと感じた。

公民館の方の話の後、公民館の方を交えながら自分達の今後の活動方針を決めていった。普段自分達だけで話すのとは違い良い表情で話合いを進めていた。外部の方に関わってもらおう事で、責任感を感じて活動を行う事が出来ているのだと実感した。勇一と実行委員と公民館の方に感謝。

(4) 3年間の目標のロゴの発表 6月下旬

実行委員による3年間のロゴを発表した。右の図がそのロゴである。右の図は、モノクロだが、実際はカラーであり、安居を表す「ホテル」「自然」そして、美しい星空を表す色使いにしてい



図2 ロゴの発表とロゴ

る。そして周りには、クラスのメンバー全員で活

動を創って行きたいという思いを全員に自分の顔を描いてもらい、そこに貼ることで表している。中心には、安居を誇りに思えるようにという意味合いを込めてプライドという文字を配置した。プライドは、教員の入れ知恵もあったが、他の事に関しては、実行委員のメンバーが夢中になって行っていた。放課後生徒の家に集まって完成させるなど熱心な姿勢に圧倒された。

(5) 2年生と合同実地調査と内容決定 7月中旬

2年生も地域に根ざした活動をするということで、伴に実地調査を行った。これは、先輩が後輩を引っ張る活動にもなればという事で、教員側からの提案で行われた。「文化」「自然」「歴史」「水・ホテル」の4つのカテゴリーに分かれて、地域で活動している方に公民館で話を聞いた。この地域の方には公民館の方が声かけを行ってくれて実現した。生の話を聞けるという事で、生徒はイキイキした目で活動に臨んでいた。2年生も率先して質問するなど先輩としての背中を見せてくれたように思う。



図3 実地調査

(6) 活動内容の決定 7月下旬

活動内容を7月いっぱいまで決定した。最初に以下の内容で各グループは提出してきた。

- 【自然】ビオトープの改修とパンフレット作り
- 【文化】オシッサマについてのツアー
- 【ホテル・水】ホテルのオブジェをつくる
- 【食】安居クッキーをつくりモアイの顔をプリントをする

このテーマを見たときに正直少し「浅い」と感じた。そこで、もう一度①学習の目標である「地域に根ざした活動にする」を提示して考え直す時間をとった。その際、各チームには以下の話をした。

- 【自然】パンフレット作りはいいが改修して結局どうしたいのか。それが地域の人にどういいのか。
- 【文化】ツアーは、どこまで回るのか。※このチームは割と固まっていた。
- 【ホテル・水】オブジェをつくってどうするのか。どう地域に根ざす形になるのか
- 【食】なぜクッキーなのか。安居の食をどうしたいのか。

その後、各班に持ち帰って話し合いが行われた。迷ったりずれそうになるときに戻れる目標があるのは、生徒達にとって良い道しるべになっているように感じた。その話し合いでは終わらず、各班で次の時間までに話し合っておくこととなった。自然班は休み時間も活発に話し合うなど非常に熱心だった。ホテル班も主に女子が中心となって活動の柱を決めていた。

次の週の総合では、各グループから内容発表を行った。最終的に以下の内容になった。

- 【自然】ビオトープを通して安居の自然について知ろう。
- 【文化】安居探検ツアーをしよう。
- 【ホテル・水】ホテルのオブジェ作りとホテルを育てよう。
- 【食】安居の食を発信しよう。

になった。

ビオトープ班は、全員の意見をうまく混ぜ合わせ、まず、自分達が安居の自然について知り、それをまとめることで、安居の自然の良さに気づいてもらおうと考えた。理科の授業で野草を花のつくりで分類したことが生徒の中に生きていてこのような活動になったようだ。

文化班はより内容を具体的にする形で提案を行った。無形文化財であるオシッサマをも

っと分かりやすく説明したいとのことだった。小学3年生でオシッサマについて学ぶ授業があるので、そこに寄与できないかという考えも伝えてくれた。

ホタル・水班は、オブジェをつくって地域の方の目につくところに置く事で、地域だけではなく、学校の前を通る人にも見てもらうとの事だった。また、6月に1年生が主催したホタル観察会でとってきたホタルを今年は育てようということにもなった。

食グループは安居地区に伝わる伝統料理を広めたいという事になった。具体的な内容はまだ決まっていないが発信をキーワードに行っていくこととなった。

どの班もイベントを起こすことでこのプロジェクトの目標を達成することとなった。そして、文化班は、小学3年生でオシッサマを勉強するので、小学2年生に。自然班は、季節の生き物を勉強する小学3年生に。水・ホタル班は、来年度一緒にホタル観察会を開くために小学6年生にイベントを行うこととなった。イベントだけをやって終わりにならないように教員側も注意してみていかなければならない。

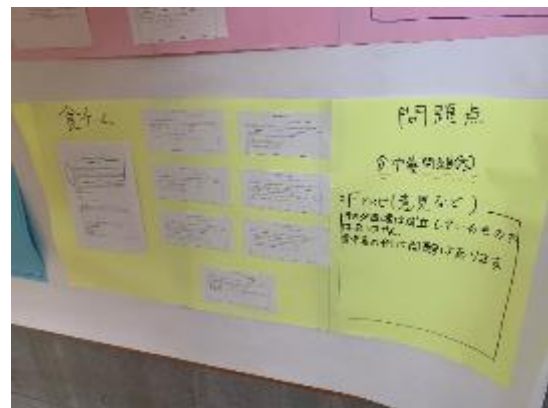
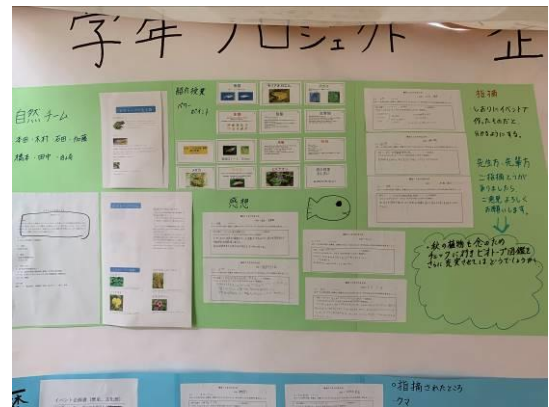


図4 企画を学年掲示板に貼って先輩から意見をもらった。

(7) イベント実行まで

イベント実行までは、各班によって状況が変わるので、班ごとに書いていく。

時期	文化	自然	水・ホタル	食
7月下旬	<ul style="list-style-type: none"> 探検経路の相談 探検するルート をどこにするか話合 った。探検は、本当 にオシッサマだけで 良いのかなどの話合 いもなされた。 	<ul style="list-style-type: none"> 状況確認 ビオトープに行 き、どこに何がある のか確認した。その 際夏の植物の写真も 何回かにわたって撮 影。 	<ul style="list-style-type: none"> 班の中で役割分担 ホタルをつくる 班とホタルについ て説明する人で分 けた。また、育て る人も決めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の伝統食調べ 公民館が主催して いる伝統食のイベン ト内容と食べ物につ いてより詳しく調べ た。
8月上旬	<ul style="list-style-type: none"> 探検ルートを実際 に確認 探検ルートを実際 に歩いてみた。歩い て危険箇所、時間、 歴史関係のもの確 認を行った。実際に 軽く感じていった時 間もなかなかにかか るなど実際にやっ てみないと気がつけ ないということに気 がつけていた。やは り経験が人を学ばせ 成長させるのだと感 じた。 	<ul style="list-style-type: none"> 植物の名前調べと 生き物調べ ビオトープの植物 の名前を調べた。友 秋という生徒が植物 についてとても詳し く、中心になって調 べていた。この時点 で企画する側と調査 部が自然と別れ、良 いチームになってい た。友秋は、普段は なかなか発表等も出 来ないが自分の能力 を發揮できる場があ り、それが社会変革 の一端を担える事を 私は嬉しく思った。 	<ul style="list-style-type: none"> 竹採集 安居地区に多く生 えている竹を使って ホタルをつくるここ となった。竹を切り 干した。 ホタルをつくる ホタルをつくる担 当になった瑞雪は、 家でホタルの設計図 を考えた。ホタル作 りの瑞雪はまだどこ か他人任せな様子。 	<ul style="list-style-type: none"> ゼリー作り 公民館がつくって いるゼリー作りを行 う事となった。作り 方を公民館の人にき き、材料の準備を行 う。古代米が安居地 区はがんばって育て ていることから古代 米でムースを作っ ても良いのではとい う意見も出てくる。目 的であるはずの「伝 統料理の発信」から 少しずつずれ始め た。
8月中旬	<ul style="list-style-type: none"> 夏休みで活動休止 	<ul style="list-style-type: none"> 草刈り ビオトープが草で ひどかったため草刈 りに集まった。運良 く地域の人が協力し てくれ1時間できれ いになった。その後 今後のことを相談し たいということにな ったが学校が休みの ため、学校に集まれ 	<ul style="list-style-type: none"> 夏休みで活動休止 	<ul style="list-style-type: none"> 夏休みで活動休止

<p>9月上旬</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校長先生ヒアリング ・紙芝居作り 小学2年生でもわかるように紙芝居を用意した。 	<p>ないことを伝えるとZOOMでやれないかという事になった。夏休みに1回担任も踏まえてZOOMで会議し、今後どうするのか話合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校長先生ヒアリング ・秋の植物調べ 2手に分かれ秋の植物と生き物を調べと発表資料作りを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校長先生ヒアリング ・ホタルの紙芝居作り ホタルの一生を小学生でも分かるように紙芝居作りを始めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校長先生ヒアリング ・古代米ムースとゼリー作り 古代米ムースとゼリー作りを何度も行っていた。同時にムースのパッケージもつくった。
<p>～</p> <p>10月下旬</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パンフレット作り 探検する道にある仏像等をパンフレットにまとめた。地図も載せることで、経路もわかりやすいように工夫していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表資料づくり パワーポイントを使って発表資料をつくった。画用紙にも伝えたい内容をまとめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホタルの模型作り 瑞雪が1人で家で作成。両親にもアドバイスをもらい進める。休みの日は同じグループの友達も瑞雪の家に行き作業した。 	<p>古代米ムースは計4回試作。公民館の方にお世話になりながら作業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業が滞る ムースはネットにものっていることが理由で作業が滞りだす。
<p>11月初旬</p>	<p>最終調整</p>	<p>最終調整</p>	<p>最終調整</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生に説明 3年生が地域の食について知りたいということで3年生に食について説明することになった。チームの中の美佳だけが説明している等の意見をもらい、もう一度リベンジさせてほしいとお願いを3年生にした。

(8) イベント当日

イベント当日は、生徒たちが活動内容をまとめ
た。

<文化チーム>

歴史・文化グループでは、小学2年生を対象にオシッサマに関する名所を巡る予定だったが、
当日に雨が降ったので小学校の会議室で以下の内容を行った。

・パンフレットの説明

予め自分たちで作ったパンフレットについて、少し分かりにくい箇所を楽しく説明した

・紙芝居

オシッサマの歴史を自分たちで紙芝居を作って読み聞かせをした

・クイズ

パンフレットや紙芝居に出てきた内容を参考にして自分たちでクイズを作り、出題した

・公民館の方々からの説明

公民館の方々に来てもらい、私たち説明するには難しい箇所を実際の写真を使って2年生で
も理解できるように説明して頂いた

上記の内容をご覧くださると、物事が順に進んでいるように見えるが、実はそうでもなかつた。

グループのメンバーが決まった数日後、僕たち8人は計画を進める為、集まった。しかし沈黙
が続き、結局時間だけが過ぎ去っていった。

また、次の総合で集まった時、ある男子がしびれを切らした。『ちょ、みんなでどういう企画に
するか話し合おうよ。』その一言を合図に皆が自分の意見を言い始めた。

段々皆が意見を言って話し合ってきたが、又事件が起きた。意見が割れてしまったのだ。企画
の題名について『A派』と『B派』と『どっちでもいい派』に分かれた。これについて、それぞれ
が主張し始めた。なかなか決まらず、結局『A』と『B』の意見を組み合わせることになった。

だが、本番になるにつれて作業が効率よくできるようになっていた。パンフレットを作る人、
クイズを作る人、地図を作る人、紙芝居を作る人に分かれて作業を行い、作業が終わった人は人
手が不足している人のところへ行って作業を手伝ったり、助け舟を出したりしてそれぞれが時間
いっぱい作業を行った。リハーサルも何回か行った。

迎えた当日…雨

話し合いの時、無駄な時間が多かったため、リハーサルは数回しか行えなかった。リハーサル
は晴れの日を想定して行っていたので、当日に雨が降って急な予定の変更に対応できなかった。
紙芝居・クイズは元々行う予定だったのでスムーズにできたが、パンフレットの説明は少し詰ま
ったところがあった。

しかし、公民館の方たちが上手くフォローしてくれたこともあって、最後の感想タイムでは「クイズが楽しかった」「昔の人たちはこんなことをしていた事に驚いた」など、2年生にとって楽しさや新しい発見、驚きに気づけた1時間だったと思う。

また、僕たちにとっても、今回の総合を通して色々な事に気づけたと思う。
僕たちに足りなかった事は、

・コミュニケーション力

初めの話し合いの時、本当は皆で話し合いたかったが、自分から話題を提供する事はあんまり得意じゃなかったから結局黙ってしまいました。言えばよかった。(後日談)

・(急な予定の変更についての) 対応力

リハーサルはやっておくべきだったが、出来なかったのであればそれは仕方ない。なるべく沈黙が続かないようにフォローしたかった。(後日談)

・笑顔

いくら凄い企画でも、笑顔がなかったらつまらない。2年生の前で笑顔で居れたかどうか少し心配。(後日談)

主に上記の3項目だったと思う。

これからは、今回とは違うメンバーになったら自分から痺れを切らす側になる。
そして、時間を有効に活用して時間をかけた分だけ素晴らしいものになるように努力する。

文責 中川愛都
中川渥一

<ホテルチーム>

私達は、令和2年11月11日に小学校で6年生に水・ホテルのイベントを開きました。

そして、自分達で全てイベントの企画をしました。

クラスの目標として、『地域に根ざしたイベント』、『みんなが楽しめるイベント』という2つでイベントの企画をしました。

そして、自分達の班でも『ホテルについて詳しく知ってもらおう』という目標をたてました。

イベント内容はメインに紙芝居。その他にホテルの模型の色塗りとホテルの説明をしました。はじめはホテルの模型の色塗りをメインでやろうとしていましたが、イベントの参加者に「ホテルについて知ってもらえるのか?」と考えると模型の色塗りだけでは自分たちの班の目標にあっていないことに気がきました。そして、「一番ホテルについて知ってもらえる」企画は紙芝居と考えたので、紙芝居をメインにしました。

当日は、約1時間のイベントでした。6年生に紙芝居グループ、ホテルの胴体の色塗りのグループ、頭の色塗りのグループの3つのグループに分かれてもらい、10分ずつでローテーションをしました。そして、残りの時間でホテルの説明をしました。

- ・紙芝居

『ホタルの一生』という紙芝居を画用紙でつくりました。ホタルの成長が分かるように、卵～成虫までのことを紹介しました。

- ・ホタルの模型の色塗りの準備

- ・ホタルの胴体の色塗り

- ・ホタルの頭の色塗り

これらの模型は、色を塗るときに「イベントカラー」という絵の具のようなものを使用しました。そして、私達が色を決めて下書きしたところに塗ってもらいました。6年生が楽しめるように、塗りたいところを塗ってもらいました。

- ・ホタルの説明

説明時には、6年生により分かりやすく説明するために、パワーポイントを使って説明しました。しかし、中学校のパソコンは小学校では使えないというミスが起きてしまいました。

私たちが、水・ホタルのイベントをやって『思考力』、『やり遂げる楽しさ』、『達成感』、『対応力』、『発言力』、『コミュニケーション力』、『行動力』という力がつきました。でも、私達に足りなかった力は『適応力』でした。だから、私達はこのイベントで学んだことを活かし、『環境に従い行動や考え方をうまく切り替える』という力を身に付けていきたいです。

文責 中嶋 恵大
山城 和湖

<自然チーム>

私たちは、安居地区の自然について知ってもらうために、この地区の自然が集まった場所「ビオトープ」を使い、小学3年生を対象としたイベントを開きました。イベント内容や企画書作りなどは、すべて自分達で考えて実行しました。夏休みには「zoom」を使った会議を行い、意見交換や準備を進めました。

最初は、やりたい事や意見が出てきて話し合いが進んでいたけど、時間が経っていくにつれ、「全員が楽しめる活動にする」という大目標からみんなの意見や気持ちが少しずつ離れていきました。そのため、全員が自分の役割をもてなくなり、活動準備がなかなか進まなくなっていました。

ですが、総合の時間にそれぞれのグループが集まって、一人ひとりが「今、自分が思っている事」をメンバーに伝えるという活動をしました。このグループでリーダーをやっていた私にとっては、「リーダー」という役割に対する考え方が大きく変わった活動でした。

この活動があった事によって、自分だけではなく、他のメンバーの「気持ち」を知ることができました。

そこで、私たちのグループは「自分の意見をもつ」「自分から率先して動く」という2つの目標を決めました。目標を決めたことで、話し合いもスムーズに進み、全員がしっかり自分の役割を持って活動する事が出来たので、目標を決めて良かったと思います。

メンバー全員が、クラスやグループで決めた目標に向かって、同じ気持ちで活動した事でイベントを開くところまでもっていくことができました。

そのイベント内容は、まず公民館でビオトープの生き物や植物の紹介授業をしました。その際、

自分たちで写真を撮ってきて作った「ビオトープパンフレット」を配りました。それを見てもらいながら授業をし、ビオトープにいる生き物や植物を知ってもらいました。

紹介授業は3年生に3つのグループに分かれてもらい、安居地区にしかない植物「ミズアオイ」や「モリアオガエル」「メダカ」について紹介しました。その後、全員でビオトープに行き、そこに生えている葉っぱを数枚、採ってきてもらいました。3年生の皆さんは積極的に質問をしてくれて、初めて知った知識を活かして色々な植物や生き物に興味を持ってくれました。自分たちで最初から考えた、この活動をかたちにして残しておきたくて、ビオトープの葉っぱを押し花にしたしおりを作ってもらうことにしました。完成したしおりは、後日感謝の手紙と一緒に小学校に渡しに行きました。

初めて自分たちが中心になって活動をして、「率先力」「対応力」「思考力」などの多くの力がつきました。この力を今後の活動でも活かしていき、新たな事に挑戦していきたいです。

文責 白崎太一
本田亜里紗

(9) 活動報告書作り

活動のまとめと来年度の活動内容の検討のために活動報告書を作った。パソコンでまとめたものをポスターにする班もあれば、直接ポスターに書いた班もあった。

活動報告書

～ ホタルのイベントを通して ～

目標
地域に根ざしたイベント
ホタルのことをわくわく知ってもらい

紙しばい・ホタル紹介
① パソコンで毎月ページをポイントで画用紙で裏書しました。
② 読む練習をした。
③ ながさ「ほたる」が埋められた、こまわかれたのを喜ぶ。

結果
行の活動が目標と異なっていた。
一部の人が楽しめていた。

反省
ホタルの生態をもう少し詳しく。
タイムスケジュールをもう少し明確にする。


今後
・ホタル観察会をする
・ホタルを育てる
↓
みさげ川に放流

模型
① 竹の模型を作った。
② 作れない部分のアクリルで骨組みを作った。
③ その後、ほたるの色を塗った。

イベント
イベント名 ホタルの大切さはどなたも
-ホタルへの気持ちを伝える-
日時 11月11日(水)

イベント内容
1.ホタル紹介
2.ホタルの模型の色ぬり
3.ホタルの紙しばい

僕たちがつくれたホタルの模型に安居小学校の6年が色をぬりました。



活動報告書 自然

目標
安居の自然の良さに気づこう!

計画 → 全員でアイデアを出し合う。
最終的に自然の良さを知り、自然の恵みを大切にしよう。

準備 → 国語書をパソコンで作る。
自然の恵みや自然の恵みを感じて、自然の恵みを大切にしよう。
自然の恵みを大切にしよう。
自然の恵みを大切にしよう。

今後
種とり ↓ 保存 ↓ 育てる

育てる ↓ 保存 ↓ 種とり

企画書制作
担当の先生に説明
中学校校長先生に説明
小学校校長先生に説明
3年生の担任の先生に説明
完成

イベント
① 公民館でピストアの生き物・植物の紹介授業
② 3年生3つのグループにわけしつづつ紹介
③ ピストアへGO!!
④ (お)作りをするために、1人1枚植物性
⑤ 植物の名前調べ
イベント制作 → 3年生が楽しかった。

結果
楽しんで安居の自然の良さに気づいてもらえた

活動報告書 - 歴史・文化 -


目的
私たちの地域では、小学3年生になると地域の文化や歴史について調べ、公民館で発表する機会がある。それに生かしてほしいと思った。また、私達の住んでいる安居地区について知ってもらい、もっと多くの人に広めてほしいと思った。

実行・活動
小2の子が対象に、地区で有名なオンサマについて紙芝居、クイズ、安居地区のパンフレットなどで紹介した。また、公民館の方たちにも来ていただいて、地区の歴史について話していただいた。


タイムテーブル
0分～2分 自己紹介
2分～5分 紙芝居
5分～15分 パンフレットの説明
15分～25分 クイズ
25分～45分 公民館の人からの話
45分～50分 感想タイム
以上の予定で終了。
イベントは雨天のため、雨天の日で行った。

今後の予定
今後は晴天時に行う予定だったオンサマ巡りの旗や着ぐるみ、CMコンテストに挑戦して私たちが住む安居地区について色々な方に広めていきたいと思ふ。

イベントについて
イベント名 オンサマの巡りの旗
イベント開催日 2020年11月11日(水)
2・3階目
来場人数 安居小学校2年生(33人)全員
開催場所 晴天時 - 安居地区 一部
雨天時 - 安居小学校会議室



結果
2年生の子達にオンサマについて、安居地区の歴史について知ってもらい、楽しく知ってもらえることが出来たと思う。



反省点・考え・感想
予定通り進んでいった。
悪天候時の対応に対応できなかった。
初めは緊張で、全く意見を言えなかった。
あまり進まず、他の班に比べて遅れていた。
全く進んでいなかったので、みんなで進んでいこうと話し合った。
その日から、意図的に発言したり、準備の進め方を変えた。
意見がぶつかることもあったが、成功の多い中、感謝することになった。

(10) 省察

*川端康誉

今回活動の大きな目標だけ設定して活動はすべて生徒に任せる形となった生徒たちは自由な発想で様々なアイデアを出す中、自分の個性をぶつけ合いながら計画を進めていった。自然グループでも自分のうまいかない気持ちを仲間に涙ながらに話す場面や、食グループではなかなか意見がまとまらず、感情をあらわにし、意見を言い合う場面も見られた。なぜ生徒たちはそこまで、夢中になり活動に打ちこむことができたのだろうか。大きな要因は2つあるのではないかと考える。

1つめは、振り返ることのできる目標があること。今回「地域に根差した活動にすること」と「活動している人も参加者も全員が楽しめる活動にすること」を目標とした。迷ったり、活動内容がずれてくると教員が「それは目標にあってるの？」といつも質問していた。すると生徒たちは、自然とここがあっていない、そもそもずれていたと方向を修正しながらジグザグにでも前に進んでいた。

2つめは、「責任の所在を生徒に置くこと」である。活動の舵は常に生徒が握っていた。そうすることで、常に活動の責任は生徒にあった。責任があるからこそ手を抜けない。手を抜けないからこそ一生懸命になれる。逃げられない状況だったからこそ、そこに成長があったのではないかと考える。

今回、食グループは中途半端な状態で終わった。生徒の感想には、「リーダーとしてまとめられなかった。」「何も残せなかった」という声も聴かれた。しかし、そのメンバーたちも次に行われた中学生が小学生に学校紹介をする場で授業グループのリーダーとして、はりきる姿を見せてくれた。「なんでそこまで頑張れたの」という質問に「食グループのときの失敗があったからです」と力強く答えてくれた。普通の学校なら校長先生や地域の方によく見られたいがために企画の成功に教員は躍起になるが、成功だけにこだわらず、失敗することも多くの学びがあることを感じる事ができた。

*立山泰伸

本年度の第1学年の総合的な学習の時間は、コロナ禍にあって例年実施されていたものができなくなり、全てがゼロからのスタートであった。しかし、そのお陰で学年としてどういうものに取り組んでいくか学年全体でしっかり考えることができ、その結果、教員にやらされる活動ではなく、生徒主体の活動を展開することができた。

*加畑一代

学校スタートからすぐに始まった学年プロジェクトで、私は主に食グループと一緒に活動した。生徒は、自分たちが何をねらって何を発信するのか、毎時間、考え、悩み、実に多くのことに挑戦していた。しかし、食グループは最終的に発信するという形には至らなかった。その過程で生徒は多くのことを学び、その経験を次に繋げ、次のプロジェクト学習に生かしていった。そんな生徒を見ながら、一番多くのことを学んだのは私である。長い教員生活の中で、常に考えてきたことは、生徒に成功体験を多く積ませることであった。生徒には「失敗してもいいよ」と言いながら、実は失敗しないように常に気を張り、生徒が成功したと思えるようにルールを引いていた。今回の失敗をするという体験は、生徒が主体の活動そのものであり、私にとって「本当の意味の生徒主体とは何か」を自分自身に問う初めての貴重な経験であった。